

—老後意識における伝統的意識の持続と変容—

○常葉学園大教育 佐藤宏子 お茶の水女大生活 袖井孝子

目的 激しい家族変動の渦中にある農村地域で、1982年と93年の2回にわたって中高年既婚女性の追跡調査を実施した。本報告では、対象者を生年10歳区切りの3つの出生コーホートに区分して、伝統的意識の持続と変容という視点から、この11年間に生じた老後意識の変化を明らかにする。

方法 1982年7月、静岡県志太郡岡部町朝比奈地域において30～50歳の有配偶女性475人全員を対象に訪問面接調査を実施した。次いで93年7月、追跡調査を実施し324人からの回答を得た。

結果 ①82年時点では出生コーホートによる老後意識の差異は小さいが、93年ではコーホート間の差異が大きい。②老後意識の変化は、年長コーホートで最も小さく、年下コーホートで最も大きい。中間コーホートは年長コーホートに近似しているが、「既婚子との同居形態」における生活分離意識が高まっている点では年下コーホートと同様の傾向を示す。③伝統的意識は加齢効果にもかかわらず「同居既婚子との家計の共同」「同居既婚子と同棟で暮らす」「老後の経済生活を子供に依存する」「長男同居」「不自由になった時は長男の嫁の世話になる」という側面において衰退している。④「既婚子との同居」と「不自由になった時には子供の世話になる」は、通代的に変化が小さく伝統的意識の持続が認められる。ただし年長・中間コーホートは「一貫同居」志向、年下コーホートは「途中同居」志向であること、年下・中間コーホートは年長コーホートに比べて生活分離度の高い同居を希望していることなど、出生コーホート間で「同居」や「子供」の意味内容に差異が生じている。